

## 日本建築学会北陸支部大会2008 学生による語り合いのシンポジオンの報告

### テーマ:「2008 年、この惨憺たるも愛しきまちへ・・・」

2008 年度北陸支部大会実行委員会

土田 義郎 (金沢工業大学 環境・建築学部)

富樫 豊 (富山建築・デザイン専門学校)

#### 概要

大会2日目の午後、「2008年、この惨憺たるも愛しきまちへ・・・」というテーマで学生たちが取り組んでいるプロジェクトの紹介と相互理解を企図したシンポジオンが開催された。参加チームは5チーム(福井、富山、石川より)、会場は50名を越える参加者があった。最初に各プロジェクトの概要を説明してもらい、その後フリータイムとして質問したり、意見を言い合う時間を設けた。フリータイムには各プロジェクトごとにコアタイムを設け少なくとも15分間は応答に当たるようにしてもらった。実際は意見交換が弾んでそれよりも長く対応していたと思われる。じっくり時間を取って互いのプロジェクトを見聞きすることで、学生たちは大いに刺激を受けたようである。

趣旨: 日本は急峻な地形と明確な四季を有し、それに適合した暮らしを営んできました。この特色のある風土も、時とともに移り変わってきています。画一化された建物が立ち並ぶこともあれば、街の文脈を断ち切るような建築が主張しているまちもあります。その一方で、高齢化や人口減少の中で活力を失いつつあるまちも存在しています。自然災害により大きな影響を受けたまちも多いのはご存知の通りです。さて、このような現状を目の当たりにして、一体どのようなかわりか考えられるでしょうか。本当に良い建築、本当に美しい風景とは何なのでしょう。純粹な気持ちで、まちへの思いを表してほしいのです。具体的なテーマと内容はプロジェクトごとに決めてください。継続的に取り組んできた成果でも、今回のテーマを受けて新たに企画したプロジェクトでも構いません。取り組み方は自由です。デザイン、構造、環境、またその垣根を越えたトータルな考察もありえます。直接社会に役立てば望ましいのはもちろんですが、一つの学びとして取り組むことも大いに奨励いたします。建築を学ぶ学生としての、空間作りの意欲的な取り組みを期待しています。

実施日時: 2008年7月27日(日) 13:00 - 17:00

場所: 金沢工業大学 8号館104室

発表題数: 5件

参加人数: 65名

内訳(学生39名(内会員7名)、一般[教員]15名(全員会員))

進行役: 土田義郎(金沢工業大学)

プログラムとそのときの様子

13:00- シンポジオン趣旨と進行の説明

13:05- 口頭発表(ブースで発表) 各グループ15分以内。質疑応答5分以内。

13:05 [1]「プロジェクトい〜ざあ〜耐震改修デザイン都市計画〜」

発表: 福井工業大学 建設工学科建築学専攻4年 八田有輝(代表)、

春日智明、小山篤史、園田泰弘、東角昂樹、

松島勇介、矢野和彦

アドバイザー教員: 永野康行

13:25 [2]「まち、再考 学ぶ・探す・つくる」

発表: 富山大学 芸術文化学部3年 加藤祐衣(代表)、鈴木雅代、磯部龍、加藤智子、古川光太

アドバイザー教員: 貴志雅樹、横山天心

13:45 [3]「小原ECO プロジェクト・古民家修復活動」

発表: 福井工業大学大学院 修士2年 深澤 翔(代表)

平成18年度参加学生: 多米淑人(大学院生)、岡澤雄一、下矢康二、田崎良一、田口和代、深澤翔(以上、吉田研究室4年)、和田忠明(大学院生)、西一生(4年)、小野優士(3年)、倉島彬(2年)

平成19年度参加学生: 多米淑人、深澤翔(大学院生)、伊賀義晃、柴田直樹、高橋直樹、藤原雄哉、吉田良(以上吉田研究室4年)、小森星、南直行、堀江章人、堀江邦聡、吉田恭平(以上、4年)、倉島彬、松村浩美(3年)、野中裕介、小南佑樹(2年)

アドバイザー教員: 吉田純一

14:05 [4]「新しい住宅のカタチ」

発表: 金沢工業大学 環境・建築学部建築学科3年 石黒功(代表) [3年]小野瀬尚利、左橋葉子、鈴木篤志、清野隆、塚畑大樹、野島梓、牧野俊崇、森田雄一郎 [2年]石月亜希子、上出真希、笹野友樹、高橋亘、徳田絢香、中川達心、平野周、宮里宜雅、山本亜紀子 [1年]枝吉拓郎、大村周平、大桃諒介、奥田沙里、木山真理子、京井貴史、源石和真、小西康司、近藤秀一郎、千田可奈子、宗倉昇大、田中成樹、徳田裕大、成見大介、村山剛史、渡辺哲志、渡辺良典、横間奈菜世、鎌仲諒

アドバイザー教員: 下川雄一

14:25 [5]「眺望のよい崖地にたつ住宅」 夢考房建築デザインプロジェクト

発表: 金沢工業大学 環境・建築学部建築学科2年 山口翔太(代表)

尾崎崇史、小笹裕一郎、古澤潔、村山和聡、山田将史、太田慎一郎、加藤千尋、神田謙匠、武田健太郎、谷田恭平、田淵拓宏、塚本哲史、八木啓太郎(金沢工業大学環境・建築学部建築学科2・3年 建築・都市デザイン学科2・3年)

アドバイザー教員: 宮下智裕

14:45- 休憩

14:50- フリーディスカッション

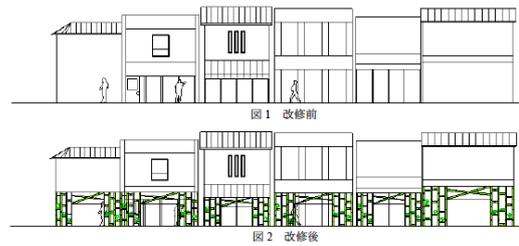
15:55- 自己評価(壇上で発表) 各グループ5分以内。ディスカッションを受け、評価・問題点などを要約。

16:10- 講評

16:30- 撤収

各グループの発表梗概

提出されたグループごとの原稿を要約して掲載する。またプレゼン後の質疑応答・自由討議の内容および総評も記す。



[1]「プロジェクトい〜ざあ〜耐震改修デザイン都市計画」

#### ◆発表概要

従来、建築毎に耐震診断が実施され耐震性が不足する建物は耐震改修がなされてきている。その際、建築物自体の耐震性は改善されるが、その改修方法は個々の建築物について決定されるために、外観をはじめとする「デザイン」は“まちまち”である。その結果、都市としての街並みは不ぞろいなものになっている。そこで、私たちは福井駅前商店街の一つである北の庄通りを対象とした「耐震改修デザイン都市」を提案した。本提案の目的は既存不適格建築物の耐震性を向上させ、かつ街並みに統一性を与えることで景観をより魅力的にする事にある。具体的には福井県の名産品をモチーフにしたオリジナルブレースを4種類デザインした。1. 菊の花部分に着想を得たブレース、2. 福井の冬の味覚「越前かき」をイメージしたブレース、3. 福井の名産竹人形から竹をモチーフにしたブレース、4. 丸岡城の石瓦をモチーフにしたブレース。これらをもって、福井県らしい町並みを表現できていると思っている。

#### ◆フリーディスカッション

Q: 奥行き方向のデザインはどうするのか。三次元で考えると、ファザードのデザインがかわってくるのでは。

Q: 1階と2階の両方で一体的に補強したほうがいいのでは。また隣家と一体で補強するともっと効果があると思うが。

A: 今回は耐震補強部材をファザードデザインエレメントにすることを目的としたので、補強効果に関する検討はしていない。

Q: 耐震補強部材はカラフルなデザインであるが、強度はどうか。

A: 単にデザインを考えたので、構造的な検討はしていない。

Q: 商店街を構成する一つ一つの商店のことも考えておかないといいデザインとはいえない。たとえば、この店ならこのデザイン、あのお店ならあのデザインといったように。この街のデザインはこのデザインといったように。

A: 今後は、そのようなことを考えたい。

◆総評: 耐震補強壁を仙台メディアパークのようなデザイン要素とするアイデアは大変おもしろく、デザインモチーフを福井の特産物とするところは郷土色あふれるもので、楽しさを感じることができる。しかしながら、デザインを1階のファザードだけではなく立体で考えてはどうか、商店街全体で考えるともっと生き生きしたデザインになるのではないかと、商店街の人も参加していく方法を考えて欲しいといった指摘があった。今回はまずデザインを楽しむとし、種々の問題は今後の課題としたことのであったので、今後は期待したい。

[2]「まち、再考 学ぶ・探す・つくる」

#### ◆発表概要

夕塾とは、高岡市、富山県の文化・産業にゆかりの深い人を招き、地域住民・学生が地域について考え、学ぶ公開講座である。昨年度は「まち再考 学ぶ・探す・つくる」というテーマのもとまちづくりについて考え、これからの高岡市のありかたについて考えた。

◎対象地域は、次の3箇所である。

- ・「金屋」(前田氏によって開かれた鋳物の町)
- ・「伏木・吉久」(かつては国府があり、また港町として栄えた)
- ・「駅前」(活気を失いつつある中心地)

◎具体的な活動は次のとおりである。

・様々な職種・経歴を持った講師の方による講演と地域住民・学生による語りあい。

・金屋町、千保川周辺、伏木・吉久、駅前・市街地中心域でフィールドワーク。

・昨年度の夕塾最終回で地域住民・高岡市市長にプレゼン。

◎まとめ: /歴史ある町並み・景観が住民の生活に溶け込み利用されていくこと /新しくキレイなだけではなく古さも活用 /街を生活の場として住人の立場で考える /観光地化がまちづくりではなく、様々なものを周りに開いていくことが地域の活性化やまちづくりである /街の魅力を伝えるためにさまざまな方法を模索していく /個々の部分だけに注目するのではなく全体を意識する /まちづくりは、観光客を呼ぶためではなく住民の生活が豊かになるようにする /地域性・歴史性や地域の個性を生かす /住民自身がまちづくりに参加する

#### ◆フリーディスカッション

Q: 街づくりを一生懸命やっているが、結論があまりにも優等生的でおもしろくない。もっと学生らしい何かがあっても良かったと思う。

A: まとめのスタイルを考えているとこうなったが、実際にはもっといろいろと書きたかった。

Q: 観光地ということと離れて生活者の視点で街づくりを考えたところがあるが、実際に扱っているロケーションは観光地ではないのか。

A: 確かに扱っているロケーションは観光地ではあるが、そこに生活者がいるので、単に観光地の街づくりとしたのではない。

Q: 自分たちの魅力をプレゼンしたとき、ほかの方(市民など)の反応はどうであったか。

A: うまく伝わらなかったこともある。市民は高岡のことをまだわかっていないと思う。そういえば、高岡市長は世界遺産に

すると、市民がプライドを持つようになるといった。

C：高岡をどうしていくかという視点が欲しかった

◆総評；高岡の街づくりについての取り組みは、地元の人も気づかないことを掘り起こして若者らしいアプローチからなり、皆さんの自信に満ちた顔がとても印象的であった。欲を言えば、高岡再生のビジョンを考え、まとめもこの地にも適用できる画一的なものばかりではなく、「高岡ならではの」そして「学生ならではの」ものを期待したい。



### [3]「小原ECO プロジェクト・古民家修復活動」

#### ◆発表概要

◎小原集落と小原 ECO プロジェクト；

福井県勝山市小原集落は、石川県境の標高約 500m にあり、県内でも有数の豪雪地帯であるが、豊かな自然に囲まれ、山の斜面にたつ家屋など優れた集落景観をもつ。明治期には約 90 戸、400 名を超す住民がいたが、昭和 38 年、同 56 年の豪雪により過疎が進み、現在常在するのは 2 戸、2 名のみであり、廃村の危機に直面している。小原集落がもつ豊かな自然環境や集落景観を守り、再生・活性化させようとするのが小原 ECO プロジェクトである。この事業は平成 18 年に小原の出身者や小原生産森林組合、福井工業大学吉田研究室が母体となり立ち上げられ、平成 18 年と同 19 年の夏期に破損家屋の修復を行ない、現在も活動を継続中である。私たち学生は現地の空家に泊まり込み、地元民や大工棟梁中間眞佐博氏（東洋建匠）らの協力を得ながら活動を行っている。

◎活動の成果

平成 18 年度の修復後、小原 ECO プロジェクトが主催する山菜ツアーや開山祭、豪雪体験ツアーなどのイベントが開催され、その都度修復された岩本豊家住宅が会場や宿泊に用いられた。平成 19 年度の修復の時には学生の宿泊施設としても利用した。

修復作業は中間眞佐博・政則父子から指導を受け、大工技術や大工道具の基本的な使い方を教わったり、実務的な話を聞くことができ、大学の講義で得た知識や事柄を実際に体験することでより理解することができた。

#### ◆フリーディスカッション

Q；小原プロジェクトは最終的に何を目的としているのか。村落住人が二人とのことであるが、村民を増やす方向に行くのか、

外部からの人をあてこんで何かをするものにしていくのか。

A：本プロジェクトでは、村の活性化を目的として、まず修復から取り組んでいる。

Q：修復建物の管理は誰がしていくのか。

A：（そこまででは考えていなかったが当然）村の方々でしょう。

Q；再生小原の利用目的は何か、管理の体制はどうか。

A：改修後にはイベントのときの宿泊施設を考えている。修復は福井工大で行ったが、管理はやっぱり小原で行うことになる。

Q；もう一度聞かすが、再生事業の目的は、最終的な目的は。

A：小原の活性化のためである。

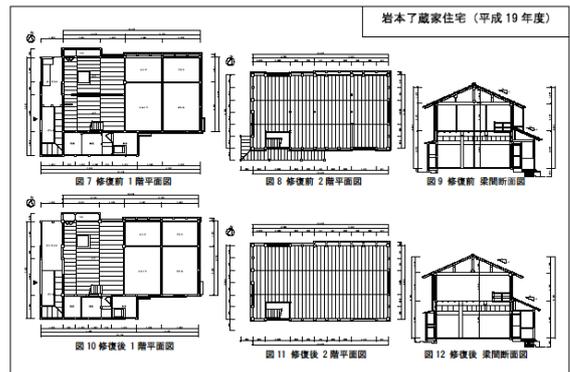
Q：今後の活動はどうするのか。村民を増やす運動などをするのか。

A：再生建物は福井工大や学教会支部のセミナーハウスになればいいと思っている。

Q：（いわゆる構造やデザインなどの）ハードについて大学で学んだこととプロジェクトの関係はどうか。

A：（何がどう役に立ったということではなく、とにかく）プロジェクトを進めていく上で、いろんな方と会話していくのが良かった。今後どうしていくのかという質問には答えられなかったが、とにかく気持ちは小原を残していきたい、その一点である。

◆総評；過疎化山村集落の自然環境・集落景観をまもり、再生活性化しようという企画は、学校の勉強に加えてフィールドワークができて、学生自身にとっても大変価値ある勉強ともいえ、学生諸君の一生懸命さが十分伝わってきた。特に、修復作業を実際に行うことは、なかなかできることではなく、その意味で、この種の問題に取り組む姿勢が、単に村落活性化というものは趣を異にし、大いに評価できる。しかしながら、修復作業などの大変な作業をこなさんがために、この後のビジョンを描いているゆとりがなかったのではあるか、今後も期待したい。



### [4]「新しい住宅のカタチ」

#### ◆発表概要

私たち CUBE は、普段学校の授業ではできない自由な発想をいかした創作活動をしている。シンポジオンのテーマは「まち」であるので、私たちは「まち」の構成要素そのものが「住宅」という小さな単位に集約できると考え、授業ではできないような提案をしたいという思いと、現実的な事情にとらわれない「自由な発想」を掛け合わせて「新しい住宅のカタチ」とい

うテーマで創作活動をした。ここでは、学年混合の3グループの提案を発表する。

◎チーム：The Link、テーマ：コミュニティとプライバシーの関係性； コミュニティとプライバシーの相反する二つの価値を同時に満たすことができないかを考えた。その答えを次のようにした。まずは、プライベートとパブリックとの間に中間空間を設け、孤立した空間をつくる。さらにこれらを統合するシステムとして、各部屋が上下にまるまる可動するようにして、状況に応じて（プライバシーかコミュニティかという）特性の変化可能な住空間をつくった。

◎チーム：2班、テーマ：自給自足と住宅

新しい住宅のカタチを追求した。ここでは家庭菜園を愛するクライアントを設定し、「食」と「住」の接近を考えた住宅をデザインした。具体的な形体は、大きな隆起するランドスケープにさまざまな形態の住宅を点在させることにより、豊かな空間をカタチにした。

◎チーム：Spacey Brothers、テーマ：日本建築空間と象徴化

魅力的な空間のほとんどは日本建築空間に通じているが、現在、諸事情によりその空間が失われてきている。この失われつつある空間を象徴化することにより、残していくことができると考えた。象徴化あたって、空間の魅力というものが「空間と空間の境があいまいで多様であること」「太陽を動的にとらえていること」にまとめられるとした。これらの2つを実現するために、面と面を垂直に自由に組み合わせT字型のような単位をつくり、それら同士をさらに組み合わせるという手法の連続で空間をデザインした。

#### ◆フリーディスカッション

Q：シンポジのテーマ「まちづくり」とCUBEグループの作品とはどう関係があるのか。

A：「まち」の構成の基本は住宅と考えて、住宅のコンセプトについて斬新なものを考えデザインした。そんな観点でシンポジのテーマに応えた。

Q：(ユニットを連結して建物にするという提案のアイデアに対しての質問。) ハウスメーカーは割合画一化のプランニングをしているが、なぜそうしたユニット連結の方法を採用しなかったのか。どう思うか。

Q：街は突き詰めると住宅であるとあるが、なぜか。

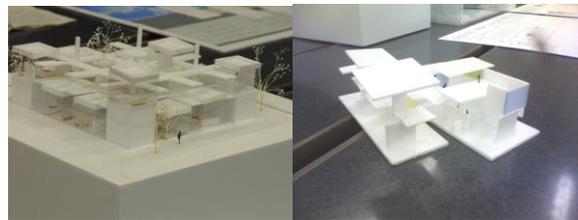
A：住宅は都市や町を小さくしたものだ。だから小さなスケールでの取り組みとして住宅を設定した。

Q：地下を作らないのが住宅と思うが。

A：地下に対して居住空間の可能性を検討したということです。

C：もともと自分たちのテーマが新しい住宅だから、コンセプト重視となった。他大学の人と話せていい経験になった。

◆総評；今回のシンポジのテーマと関連させて、住まいのコンセプトを紹介したいという学生諸君の意気込みは大変熱く、街そのものを一個一個の住宅のコンセプトから迫るというアプローチも、かえって新鮮なものを感じ評価することができる。反面、そうしたアプローチだからこそ、街という次元へどう発展させるかということがどうしても不十分となることは否めず、彼らにこうしたことを踏まえて、住宅設計に大いに期待したい。



[5]「眺望のよい崖地にたつ住宅」

#### ◆発表概要

「眺望のよい崖地にたつ住宅」の設計

夢考房建築デザインプロジェクトでは今年度の4月より「眺望のよい崖地にたつ住宅」といったテーマで設計活動を行った。合計16人で6班を構成し、各班が条件の範囲内で自由な設計を行い、それを30分の1スケールの模型をつくった。

活動自体はプロジェクト内で行うコンペを最終目的としたものであり、設計内容が固まりつつある中で今回のシンポジオンへの参加を決定したため、全てがシンポジオンのテーマに適した設計内容ではない。今回のシンポジオンでは各班の設計終了後にシンポジオンのテーマと設計内容を比較し、建物の外観や、クライアントの住まい方を顧みて考察をした。

設計条件のクライアントは30代の若い夫婦と5歳となる男の子が一人である。敷地は実際にあるものではなく、金沢市の山川環状より上に位置する場所と仮定しており、中心市街地から30分ほど離れた郊外の山の中腹にあり、傾斜地を含む土地である。付近は桜の名所であり、敷地から南側を眺めると、桜とともに市街地が一望できる大変素晴らしい眺望を持つ。

今回の設計では、街を一望できる素晴らしい眺望を念頭において、クライアントの視線をいかに確保するかを追求する傾向が各班に見られた。また、遊びの要素を取り入れたもの、生活の風景をイメージしたもの、趣味を重視したもの、外観に変化を持たせたものなど様々な住宅作品が提案されたが、それぞれが見る者のイメージを高め、生活景を考慮したものとなった。

#### ◆フリーディスカッション

Q：今回のタイトルと6個の家のデザインとをどう関連させるのか。一軒の家で景色がきまるといったイメージをうけるが。

A：今回のシンポジオンのテーマをもとに作ったものではない。街を住まいと読み替えて当該テーマに応えた。

Q：模型の制作期間は。

A：2-3ヶ月です。

C：いろんな人に見てもらって作ってよかった。

C：眺める住宅は眺められる住宅として街づくりに関連してい

ると思ってください。

C：眺望のよい傾斜地に立つ住宅とあるが、山の裾野の町から山を眺望することもあり、この点を忘れてはならない。

◆総評；設計を楽しむグループが、「眺望の良い崖地に立つ住宅」の設計作品を作っていたので、眺望というキーワードで今回シンポジオンのテーマに引っ掛けて住宅設計作品紹介ということで参加した。もともと、住宅設計のための作品であったが、街からの眺望がどうあるべきかという視点で住宅設計を進めて欲しいという指摘を数多く受けたことは、彼らには大いに勉強になったはずである。彼らは大いに満足していた。



## ■ 教員からのコメント

- ・皆さんの発表には勉強の成果が出ています。皆さんが他のジャンルの人と話ができたらいいなあ。また、直感を自分の言葉で表現できるといいなあと思いました。
- ・掘り起こし談義を大切にしてください。
- ・フィールドワークしたことに十分が意義ある。
- ・こうした活動をぜひ後輩たちに伝えていって欲しい。
- ・皆さん、卒業されてからも、討議者としてシンポジオンに参加してください。

## まとめ

今回のシンポジオンでは、学生諸君が街づくりに望む様々な視点のもとで議論が始まり、彼らが問題解決に向けて実践し交流し語り合っって多様な視点を共有しえたことが何よりの成果である。もちろん、この種の問題にまとまった統一的な結論があるはずもないが、それだけに各地域に根ざした彼らの熱い思いが各地域の街を良くしていつてくれるものと思っっている。(富樫)

今年の皆さんの発表は優等生的で まじめで良いのであるが、一面これでいいのかと、というも率直な印象でした。今の世の中は目標喪失で行き詰まっているのだから、例えば、コルビュジェの近代建築5原則に代わって21世紀の5原則はこうあるべきだ…というような大胆で自由な発想を若い人には期待したいと思っっています。そういう発想をぶつけ合い議論できるような場になると楽しいのではないかと密かに願っっています。

(桜井康宏 日本建築学会前北陸支部長)